

## ゲーテの会

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて

-日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う-

世界の中の日本。科学・文化の諸相に彼我の風土の違いを発見した人物  
(Part II 思想・文学分野)

## 「明治の精神」としての内村鑑三

講師：新保 祐司 先生

## 【講演要旨】

「明治の精神」の典型的存在は、近代日本の代表的基督者、内村鑑三に他ならない。徳富蘇峰は、「内村さんのような人が明治に産出したことは明治の光だと思う。」と90歳のときに語った。内村は、『代表的日本人』の「独逸語版跋」の中で「此書は、現在の余を示すものではない、これは現在基督信徒たる余自身の接木せられてある台木の幹を示すものである。」と書いた。この「台木」とは、単に歴史的教養を意味しているのではない。人格的なものにまで形成されたエトスとパトスの蓄積である。そして、その蓄積を回想し、自覚している精神である。

「明治の精神」は、「台木」を持っているだけでは生まれない。何ものかが、「接木」されなくてはならないのである。内村鑑三の場合は、いうまでもなく「基督教」が接木されたのであり、福澤諭吉の場合は、「文明」が、岡倉天心の場合は、「フェノロサの眼」が、中江兆民の場合は、ルソーが、夏目漱石の場合は、英文学が、といった具合に、それぞれの「台木」の個性と宿命に応じて様々なものを「接木」したのである。

「明治の精神」が生き生きとしていたのは、大体、日露戦争の勝利までであろう。それ以降、この劇的な精神は次第に薄れていく。自然主義、大正デモクラシー、マルクス主義、戦時下の日本主義と移り変わり、やがて敗戦を迎えた。そして、戦後70余年とは、精神的エネルギーを鍛えることなく、今日の空虚な日本、三島由紀夫のいわゆる「無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の」日本に墮していくだけの時間であった。

ますます深刻化する危機の中にある日本を立ち直らせるためには、「明治の精神」の代表的存在である内村鑑三を深く理解し、そこから精神的エネルギーを汲みとらなければならない。

## 【講師略歴】

昭和28年、仙台市に生まれる。昭和52年、東京大学文学部仏文科を卒業後、出光興産に入社。平成2年、『内村鑑三』（構想社）を上梓、新世代の文芸批評家として注目を集める。平成8年、都留文科大助教授に就任。平成10年、教授に昇任。平成26年より、副学長・教授。平成17年、『信時潔』（構想社）を上梓、「海ゆかば」の作曲家・信時潔を復権させた。平成19年、フジサンケイグループ正論新風賞を受賞。

著書に、『島木健作一義に飢ゑ渴く者』（リポレポート）『日本思想史骨』『国のさゝやき』『鈴二つ』（以上 構想社）『フリードリヒ 崇高のアリア』（角川学芸出版）『異形の明治』（藤原書店）『シベリウスと宣長』『ハリネズミの耳―音楽随想』（以上、港の人）など多数。編著に『「海ゆかば」の昭和』（イブシロン出版企画）などがある。近著は『「海道東征」への道』（藤原書店）『散文詩集 鬼火』（港の人）。

日 時： 2017年2月10日（金）18:00～20:30

会 場： 公益財団法人国際高等研究所

参加費： 2,000円（交流・懇談会費用を含む）

定 員： 40名（申し込みが定員を超えた場合は抽選）

申 込： 「参加申込書」（裏面）によりお願いいたします

詳 細： <http://www.iias.or.jp/public/goethe.html>

しめきり

2月8日（水）

必着



